

石川県埋蔵文化財情報

第 51 号

巻頭図版（倉垣遺跡 大場遺跡 馬蝶泊遺跡）

令和5年度の発掘調査から 所長 土屋宣雄 … (1)

発掘調査略報

倉垣遺跡（志賀町） (5)

大場遺跡（金沢市） (7)

馬蝶泊遺跡（珠洲市） (11)

令和5年度下半期の出土品整理作業 (13)

令和5年度環日本海文化交流史調査研究集会の記録 (16)

長期変化からみた高地性集落顕在化の条件 若林邦彦 … (19)

調査研究報告

石川県七尾市矢田遺跡出土の刀形木製品について 新美祥人夢・久田正弘 … (23)

石川県小松市矢田野遺跡出土鉄斧の報告 新美祥人夢・久田正弘 … (27)

三次元写真計測による散田金谷古墳石棺蓋刻書の判読 和田龍介 … (30)

加賀・能登の弥生イヌについて 茂原信生・吉永亜紀子・林 大智 … (38)

2024年11月

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

写真解説

倉垣遺跡

調査区遠景（北北東から）

志賀町南東部、安津見川左岸の丘陵から平野部にかけて立地する、弥生時代～近世の集落遺跡で、前年度調査に続く第2次調査である。

古墳時代とみられる竪穴建物1棟のほか、掘立柱建物の柱穴数基や大小の土抗を確認した。

竪穴建物（東から）

調査区南半部で検出した、隅丸方形の周溝をもつ、古墳時代とみられる竪穴建物1棟を確認した。周溝が二重になっていることから、ほぼ同一地点で建て替えが行われたものと考えられる。



調査区遠景（北北東から）



竪穴建物（東から）

写真解説

大場遺跡

調査地遠景（北西から）

大場遺跡の周辺は水田が広がり、東側には森下川、北側には河北潟が位置している。森下川下流の沖積平野であるこの場所は、森下川や河北潟の度重なる氾濫を受けてきており、調査でも氾濫・湿地堆積層が確認されている。

なお、この写真は河北潟方面から丘陵を臨んだものである。

流路に沿う総柱建物（西から）

4区第1面（西部）において、低地の側に建つ大型総柱建物（SB2）が見つかった。昨年度調査区で確認された流路からは平安～鎌倉時代（11～13世紀）の遺物が出土しており、総柱建物は流路に沿って建てられていることから、流路と同じ時期の遺構と考えられる。

河北潟周辺の低湿地に位置する遺跡では、11世紀以降に集落の開発が行われた様子が多く見られる。そのため、これらの流路や建物も、地域で行われた開発に伴うものと推測される。



調査地遠景（北西から）



低地の側に建つ大型総柱建物（西から）

写真解説

馬縹泊遺跡

調査区遠景（西から）

南北を海と山にはさまれているため海水と燃料が得やすく、製塩に適した立地である。海と水田の間にある岩場は岩石海岸で、能登半島外浦で広く見られる海岸地形である。この写真は令和5年11月16日に撮影したものであるが、令和6年1月1日の能登半島地震でこの地域の海岸も大きく隆起し、現在は異なる景観となっている。

製塩炉周辺の掘削作業（東から）

製塩炉を検出し、周辺の包含層を掘削している様子である。石灰で囲んだ内部に、包含層に混じって焼土や被熱岩石が確認できる。

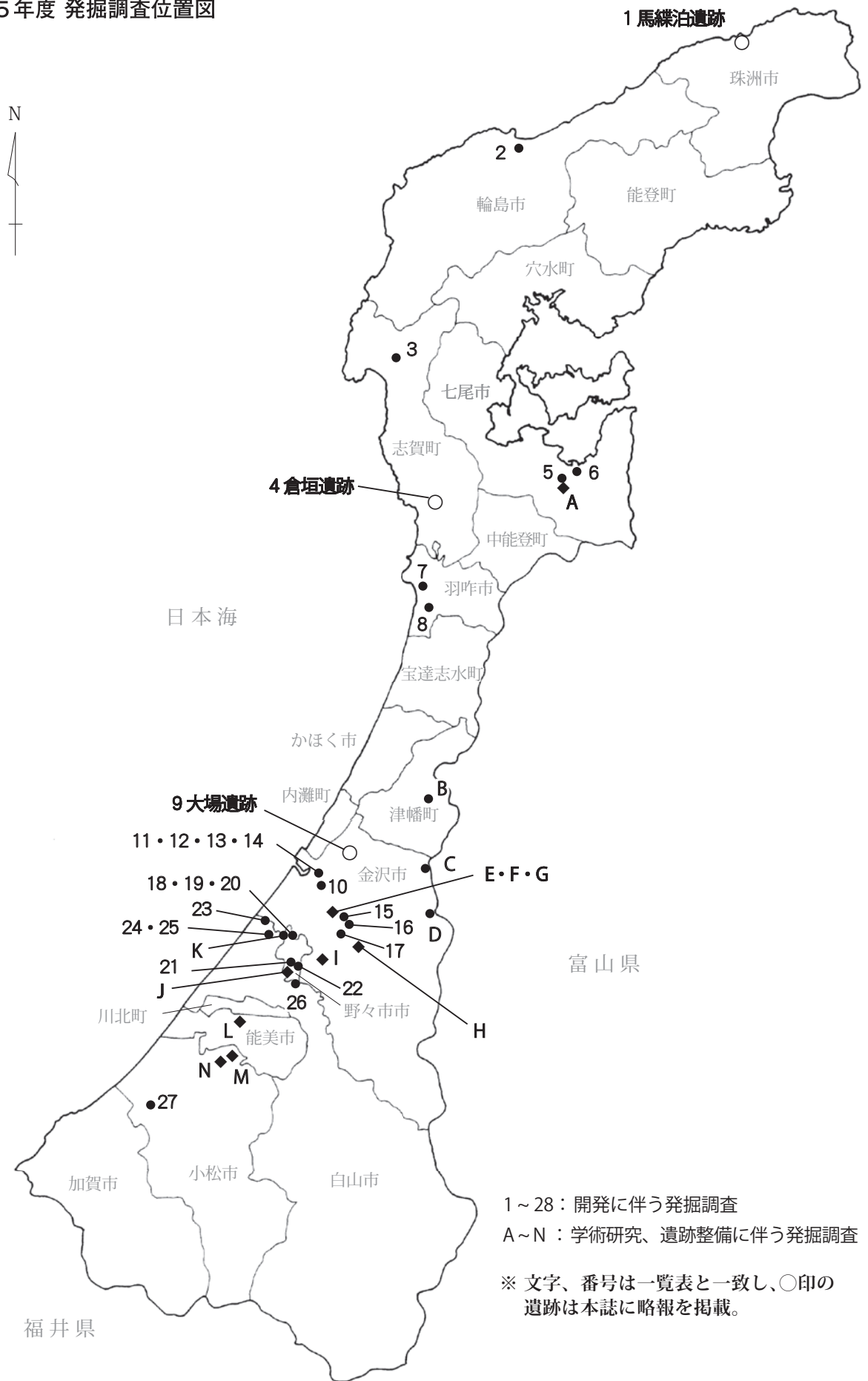


調査区遠景（西から）



製塩炉周辺の掘削作業（東から）

令和5年度 発掘調査位置図



1～28：開発に伴う発掘調査
 A～N：学術研究、遺跡整備に伴う発掘調査

※ 文字、番号は一覧表と一致し、○印の遺跡は本誌に略報を掲載。

令和5年度の発掘調査から

所長 土屋宣雄

はじめに

令和5年度に県内では、開発に伴う緊急発掘調査27件40,369㎡と、学術調査、保存目的の発掘調査14件3,390㎡が、それぞれ実施された（令和6年3月10日現在）。令和4年度と比較すれば、緊急発掘調査は5件の増（面積1,805㎡減）、学術調査、保存目的の調査が4件の増（同647㎡増）となる。緊急発掘調査を地域別で見れば、北加賀地域、特に区画整理事業が多い金沢市、野々市市、白山市に集中する状況が継続しており、調査件数で18件と全体の2/3以上を占める。一方、能登地域が8件、南加賀地域が小松市で1件と、北加賀地域以外の調査は低調に推移している。学術調査、保存目的の調査は、9機関で実施されている。なお、現地説明会は、県民が発掘現場で調査担当者の説明を聞きながら、調査成果に直接触れる大切な機会であり、令和5年度は、No.1・2・5・6・9・10・11・A・C・E・Jなどで実施されている。

1. 石川県埋蔵文化財センターが実施した緊急発掘調査

県教委から当財団に委託された発掘調査は6件10,600㎡と、平成10年の財団設立以降、調査面積は最少となった。これは、継続的に実施していた国交省関連事業の調査要望が一旦ない状況も反映しているものと推察される。地域別で見ると、能登地域が5件で調査件数の大半を占める一方、金沢地区が1件で、加賀地域では調査がない状況である。本誌では、珠洲市馬縹泊遺跡（No.1）、志賀町倉垣遺跡（No.4）、金沢市大場遺跡（No.9）の概要を掲載している。

珠洲市馬縹泊遺跡は、能登半島先端の日本海（外浦）に面した製塩遺跡で、10～11世紀代の炉跡を5基の確認した他、近世の塩田面もみつき、当該地域における塩づくりの歴史解明につながる調査となった。

旧福野瀨に流れ込む安津見川左岸の台地上に位置する志賀町倉垣遺跡は、令和4年度調査区の北側を調査し、後世の攪乱が著しかったものの、古墳時代の竪穴建物と近世の土坑等を確認した。

矢田遺跡（七尾市）は、七尾市街地東側の沖積平野に立地し、弥生時代終末～古墳時代前期初頭の1間×1間（柱間9m）の大型建造物を確認した。貴重な事例であることを鑑みて、関係機関の協力により、道路下ではあるが、現地での保存となった。なお、この大型建造物の構造・詳細時期等については、柱材の分析や周囲の検出遺構の評価等を行い、明らかにしていく予定である。（第50号報告）

令和5年度発掘調査一覧表

No.	掲載号	遺跡名	所在地	時代	内容	調査面積(㎡)	事業者	事業名
2	50号	宅田上野山遺跡	輪島市宅田町	縄文～近世	集落跡	3,960	土木部	国道改築一般国道249号(輪島バイパス)
4	本号	倉垣遺跡	志賀町倉垣	古墳、近世	集落跡	370		一般県道羽咋田鶴浜線
1	本号	馬縹泊遺跡	珠洲市馬縹町	古代	製塩遺跡	200		主要地方道大谷狼煙飯田線
6	50号	矢田遺跡	七尾市矢田町	弥生～古代	集落跡	1,400		七尾外環状線 街路整備
5	50号	古府・国分遺跡他1遺跡	七尾市国分町	古代～中世	集落跡	190		能登歴史公園(国分寺地区)
9	本号	大場遺跡	金沢市大場町東	古墳～中世	集落跡	4,480		教育委員会
6件						10,600		

金沢市大場遺跡は、令和4年度からの継続調査で、旧森下川や旧河北潟に起因する氾濫や堆積層等により、2面の調査面を確認し、第1面では、平安～室町時代の掘立柱建物、井戸、溝、小穴等を検出し、土師器や陶磁器、漆器碗を含む木製品等が出土した。第2面では古墳～奈良・平安時代の掘立柱建物、溝、土坑、小穴を検出した。当該沖積地域における集落の展開が明らかとなった調査である。

なお、今回報告の3遺跡の現地調査は今年度をもって完了しており、今後は整理・報告をとおして、各遺跡の様相をさらに明らかにし、当該地域史を理解する一助になればと考える。

2. 市町等が実施した緊急発掘調査

市町等が調査主体となった緊急発掘調査は、21件29,769㎡を数える。市町別では、金沢市が8件14,850㎡、白山市が4件7,811㎡、野々市市が5件5,308㎡、その他3市町が4件1,800㎡となり、調査面積の比較的多い3市は、区画整理事業等に起因するところが多い。

区画整理事業等を調査原因とする4件の調査を紹介する。まず、金沢市南新保C遺跡（No.11）では、弥生時代後期～古墳時代前期の平地式建物や方形周溝墓を検出し、過年度調査区からの墓域の広がりを確認している。また、令和3年度の調査で、船材と考えられる長大な木材等を確認し、船着き場または船の管理施設の可能性がある水路の延長を検出している。発見された水路は、東側に屈曲する状況がみられることから、船着き場のような施設の存在を想定し得るものであり、さらに同地点からは、花卉状の文様を墨描する土器や、墨書土器等が出土しており、その関連性や性格等が注目される。同市近岡シタダ遺跡（No.10）では、弥生時代～古墳時代の溝、土坑、奈良・平安時代の溝、土坑、小穴などを検出して、土師器、須恵器、石製品、木製品等が出土し、臨海部における古代集落の一端が明らかとなった調査である。次に、白山市宮永雁堀遺跡（No.24）は、縄文時代と中世の集落跡で、調査では、主に15世紀代の井戸と堀跡と想定される溝等を確認している。また、同市柴木遺跡（No.26）は、縄文時代～古代の集落跡で、溝、土坑、小穴を検出し、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器等出土しており、手取川扇状地開発の具体的状況が垣間見えた調査といえる。

3. 学術調査、保存目的の発掘調査

学術調査または保存目的の発掘調査は、14件を数え、うち6件は、昨年度と比して、新規または再開された調査である。

七尾市の国史跡能登国分寺跡附建物群跡（A）の調査は、寺域を把握することを目的に、今回は西側を区画する掘立柱塀の柱穴、溝等を確認している。これまでの調査結果と合わせると、南北及び西辺については把握（東側未確認）することができ、今後の追加指定に向けた基礎資料を得ることができた調査といえる。

金沢市涌波遺跡（土清水煙硝蔵跡）（H）は、加賀藩の黒色火薬製造施設であり、国史跡辰巳用水附土清水塩硝蔵跡の指定内における史跡整備を目的とした調査である。今年度は第7次調査にあたり、黒色火薬の原料を搗く「搗蔵」推定地では、辰巳用水からの導水路の延長部分、「イ黄カチバ」推定地では、礎石、盛土等を検出し、瓦の出土から瓦葺建物の可能性が指摘されている。

石川県金沢城調査研究所は、国史跡金沢城跡二ノ丸跡の確認調査（E）、数寄屋敷西堀縁の石垣保全（F）に伴う石垣の解体調査、二ノ丸御殿に付属する庭園・馬場などの屋外空間についての遺構を確認するための調査（G）、の3件について、継続して進めている。

また、金沢学院大学は、小松市等と連携して、河田山9号墳の測量調査等（E）を実施し、墳形が明らかになったことは大きな成果であるといえる。今後も官学の連携が進むことが期待される。

令和5年度 県内遺跡発掘調査一覧

◎開発に伴う緊急発掘調査

No.	遺跡名	所在地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
1	馬線泊遺跡	珠洲市馬線町				○			200	県
能登半島外浦でみられる岩石海岸を利用した、平安時代と思われる小規模な製塩炉を5基検出した。また棒状尖底型の製塩土器の頸部とみられる土器片が出土した。										
2	宅田上野山遺跡	輪島市宅田町	○			○	○	○	3,960	県
古代の建物柱穴や塀とみられる柱穴列、土坑、井戸、溝などの遺構が数多くみつかかり、複数の大型掘立柱建物群が確認された。調査地は鳳至郡の郡領クラスとみられる在地有力豪族の居宅とみられ、古代鳳至郡の中心地域の一部と想定される。										
3	里本江フクベ谷製鉄遺跡	羽咋郡志賀町中泉				○	○		80	町
鉄滓、土師器等の遺物が出土した。										
4	倉垣遺跡	羽咋郡志賀町倉垣			○	○		○	370	県
古墳時代の竪穴建物1棟を確認した。2重に巡る周溝から、同じ場所建て替えが行われたと考えられる。このほか建物の規模・配置は不明であるが、近世とみられる柱穴も検出した。										
5	古府・国分遺跡、能登国分寺跡、能登国分寺跡附建物群跡	七尾市国分町				○	○		190	県
能登歴史公園水路工事に先立つ発掘調査。狭長な調査区で遺構の全容をつかみきれないが、11～12世紀ごろの井戸5基と複数の掘立柱建物跡などを確認した。										
6	矢田遺跡	七尾市矢田町		○	○	○			1,400	県
川跡に挟まれた微高地上に、弥生時代終末～古墳時代初頭とみられる、1×1間の大型建造物を確認した。川跡からは古墳時代中期の土器や木製品が大量に出土し、その西岸では平安時代の大型掘立柱建物1棟も検出した。										
7	寺家遺跡	羽咋市柳田町				○	○		20	市
新たにカマドを伴う竪穴建物跡を発見した。他に、大型柱穴跡・畝状遺構を確認した。奈良・平安期の須恵器・墨書土器・土師器・製塩土器が出土した。										
8	羽咋古墳群	羽咋市川原町		○	○	○		○	200	市
土地造成の様子を確認し、遺構は確認されなかった。主に近現代の遺物が出土し、弥生時代や古代の遺物も混じっていた。										
9	大場遺跡	金沢市大場町東			○	○	○		4,480	県
古墳時代の溝や古代の掘立柱建物などを検出した。また、氾濫・湿地堆積層を挟んで、上面では平安～鎌倉時代の大型の掘立柱建物や井戸などを確認した。										
10	近岡シタダ遺跡	金沢市近岡町		○	○	○			540	市
弥生時代終末～古墳時代前期の溝、奈良・平安時代の溝等を検出、河川跡より墨書土器、木製品等が出土した。										
11	南新保C遺跡	金沢市南新保町		○	○	○	○		2,800	市
方形周溝墓、建物跡、水路跡などを検出。水路跡は令和3年度に船材が出土した遺構と繋がる可能性が高い。										
12	南新保D遺跡	金沢市南新保町		○	○				2,300	市
弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物跡、土坑、溝跡を検出した。										
13	南新保三枚田遺跡	金沢市南新保町		○	○				1,000	市
弥生時代後期～古墳時代前期の掘立柱建物跡、土坑、溝跡などを検出。溝跡より大量の土器・木製品が出土した。										
14	南新保コマチマチ遺跡	金沢市南新保町		○	○	○	○		5,300	市
弥生時代後期～古墳時代前期の溝跡を複数検出。出土遺物は少量であったことから、今回の調査区は集落の縁辺部と考えられる。										
15	金沢城下町遺跡(兼六元町3番地点)	金沢市兼六元町						○	1,160	市
東内惣構付近くに位置する、武家地跡の発掘調査を実施した。土坑、柱穴、井戸などを検出し、近世陶磁器、近世土器、木製品などが出土した。										
16	金沢城下町遺跡(奥村氏(支家)屋敷跡地区)	金沢市小将町						○	1,300	市
金沢城の南東に位置し、東内惣構の起点となっている奥村氏(支家)の屋敷跡の発掘調査を実施した。柱穴、井戸、土塀の基礎などを検出し、近世陶磁器、近世土器、木製品、古銭、石製品などが出土した。										
17	経王寺遺跡	金沢市宝町						○	450	市
経王寺境内付近に位置する武家地の発掘調査。土坑、井戸、石列などを検出し、近世陶磁器、近世土器、近世瓦などが出土した。										
18	御経塚オツノ遺跡	野々市市長池	○	○				○	1,008	市
弥生時代後期後半頃の集落を確認した。掘立柱建物が2棟確認され、南東側に位置する集落の中心に対して遺跡の縁辺部にあたることが明らかになった。										
19	長池カチジリ遺跡	野々市市長池		○	○		○		940	市
弥生時代後期後半及び中世の集落を確認した。弥生時代後期後半は流路から土器や緑色凝灰岩片などを多数確認した。中世は大型の溝や井戸などが見つかった。										
20	長池ニシタンボ遺跡	野々市市長池	○	○	○		○	○	194	市
弥生時代後期後半の集落を確認した。遺構は希薄であり、調査地南側に位置する集落の中心に対して縁辺部にあたることが明らかになった。										
21	末松遺跡	野々市市中林	○	○	○	○	○		2,620	市
古代及び中世の集落を確認した。古代は竪穴建物2基、掘立柱建物2棟、中世は竪穴状遺構2基、掘立柱建物複数棟確認した。										

No.	遺跡名	所在地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
22	上林イシガネ遺跡	野々市市中林				○	○		546	市
古代及び中世の集落を確認した。中世の掘立柱建物が見つかったが、調査地の約半分は自然流路であり、調査地東側に位置する集落の中心に対して縁辺部にあたることが明らかになった。										
23	八田中遺跡	白山市八田町	○	○	○	○	○	○	6,360	市
近世の溝や土坑を中心に確認。遺物については、縄文時代から近世まで幅広く確認された。										
24	宮永雁堀遺跡	白山市宮永町	○			○	○		295	市
土坑を確認し、縄文土器や石製品が出土した。										
25	宮永ほじ川遺跡	白山市宮永町	○			○	○		295	市
中世の堀・井戸・掘立柱建物・土坑を確認。土師器・珠洲焼・越前焼が出土した。										
26	柴木遺跡	白山市部入道町	○	○		○			861	市
縄文時代・弥生時代の溝や土坑、古代の区画溝や土坑が確認された。遺物については、縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器が確認された。										
27	額見町遺跡	小松市額見町			○	○	○		1,500	市
今回の調査で発掘した場所は集落の縁辺部で、道路状遺構、ピット、土坑を確認した。										

調査担当 市・町：市・町教育委員会等 県：県埋蔵文化財センター

◎学術研究、遺跡整備に伴う発掘調査

No.	遺跡名	所在地	主な時代						面積 ㎡	調査 担当
			縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世		
A	能登国分寺跡附建物群跡	七尾市国分町				○			412	市
能登国分寺跡の範囲を確定するための調査。遺跡の外郭である西辺の掘立柱塼(柱穴、溝)を確認し、その南西隅から木組遺構(暗渠)を確認した。										
B	鳥越弘願寺跡	河北郡津幡町鳥越					○		120	町
一向一揆の頃の城郭寺院の発掘調査。令和5年度は土塁内の調査を行い、主要掘立柱建物及び、基壇位置と構造を確認する。										
C	松根城跡	金沢市松根町					○		33	市
加賀・越中国境に築かれた山城の発掘調査。大堀切でトレンチ調査を実施し、大堀切法面と土塁状遺構及び2条の堀との接続関係が確認された。										
D	荒山城跡	金沢市荒山町					○		100	市
加賀・越中国境に築かれた山城の発掘調査。主郭、大堀切、曲輪などでトレンチ調査を実施し、遺構の規模を確認した。										
E	金沢城跡(二ノ丸)	金沢市丸の内						○	2,100	城
二ノ丸御殿復元整備に伴う確認調査。唐門の西側本柱・控柱の基礎、付随する掛塼の基礎を確認した。また、玄関河筋で平面六角形の枱を確認した。枱内部からは銅瓦、火鉢、陶磁器等が出土した。										
F	金沢城跡(数寄屋敷西)	金沢市丸の内						○	120	城
数寄屋敷西堀縁石垣の保全に伴う解体調査。4～8段目の解体調査を行い、近世後期の修理痕跡と石垣構築当初の可能性のある裏込め層を確認した。										
G	金沢城跡(御居間先)	金沢市丸の内						○	70	城
二ノ丸御殿に付属する庭園・馬場などの屋外空間について、遺構を確認するための調査。白色粘土を貼った池や、切石積の一部とみられる石材を確認した。										
H	涌波遺跡(土清水塩硝蔵跡)	金沢市涌波町						○	40	市
国史跡辰巳用水附土清水塩硝蔵指定地内の調査。搦蔵およびイオウカチバ推定地において、水路跡、盛土、切岸、礎石等を確認し、瓦等が出土した。										
I	高尾城跡	金沢市高尾町					○		50	市
高尾城跡の歴史的変遷を探るための調査。コジョウ地区において、主郭、東外堀切、南堀切の遺構を確認した。また、銭貨(熙寧元宝)、14世紀後半代以降の土師器皿、珠洲焼播鉢、古瀬戸平碗等が出土した。										
J	末松庵寺跡	野々市市末松	○	○	○	○	○	○	31	市
末松庵寺跡の再整備に伴う発掘調査。金堂北西隅の調査を行い、礎を用いた地盤改良(掘込地盤)の痕跡を確認した。また、金堂を取り囲む溝の再調査を行った。										
K	東大寺領横江荘遺跡	白山市横江町		○		○			250	市
掘立柱建物、溝を確認。弥生土器、須恵器、土師器、施釉陶器が出土した。										
L	西山古墳群	能美市徳久町			○				11	市
古墳の墳丘盛土・周溝を確認。土器・鉄製品等が出土。										
M	河田山9号墳	小松市国府台			○				10	大学
古墳の地形測量と西辺確認のトレンチ調査を実施した。約1/4は1986・87年に調査済みで、この範囲は消失した可能性もあったが、周溝西側の再検出により古墳全形が残存していることを確認した。墳丘上からは、石室石材とみられる凝灰岩が露出していることも確認した。										
N	南野台遺跡	小松市古府町	○	○	○	○	○		43	市
確認されている古代の礎敷遺構、中世の礎石総柱建物のうち、礎石総建物範囲の確定を行った。										

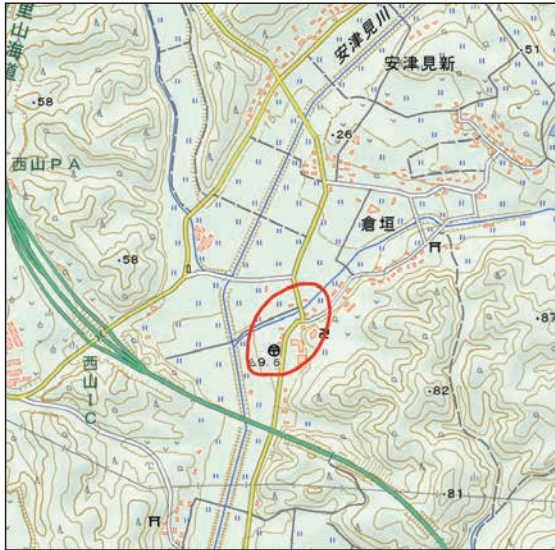
調査担当 市：市教育委員会等 城：県金沢城調査研究所 大学：金沢学院大学

※本データは「令和5年度発掘報告会」(令和6年3月10日)の当日資料を転載(一部改変)。

くら かけ 倉 垣 遺 跡

所在地 羽咋郡志賀町倉垣地内
調査面積 370㎡

調査期間 令和5年10月17日～令和5年11月14日
調査担当 金山哲哉 齋藤綾乃 井島大地



遺跡位置図 (S=1/25,000)

倉垣遺跡は、羽咋郡志賀町倉垣地内所在の、安津見川左岸の丘陵から平野部にかけて立地する弥生時代～近世の集落遺跡である。一般県道羽咋田鶴浜線の改良工事を原因とする調査で、前年度から継続の第2次調査となる。前年度の調査は今回の調査範囲の南側480㎡を対象に行い、北半部で古墳時代の竪穴建物や平安時代の掘立柱建物などを、南半部で古墳時代の川跡を確認している。今回は同調査区と南接する、北側の延長部分370㎡を対象区域として調査を行った。

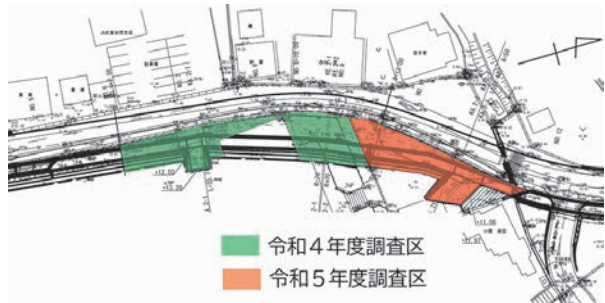
調査区は、安津見川が位置する北方向へなだらかに下る低丘陵裾部に立地し、南東側の標高が最も高い。1974～78年撮影の航空写真をみると、今回の調査区一帯は旧加茂小中学校関係の建物の敷地となっていることが判る。調査では調査区全域で近現代とみられる攪乱を受けている状況が窺われたもの



調査区遠景 (東から)

調査成果の要点

- ・調査区の北西部で、古墳時代の竪穴建物の一部を確認した。
- ・2重の周溝から、同建物はほぼ同一地点で建て替えが行われたものと考えられる。
- ・礫石が集積された土坑のほか、近世とみられる遺構を確認した



調査区配置図 (S=1/4,000)

の、一部に損壊を免れた遺構を確認することができた。調査区南半部では、隅丸方形の周溝をもつ、古墳時代とみられる竪穴建物1棟を、調査区西壁にかかる位置で確認した。同建物については周溝が二重になっていることから、ほぼ同一地点で建て替えが行われたものと考えられる。周溝の内側では複数の小土坑を確認したが、建物の西半部が調査区外に広がるため、詳細は不明である。なお同検出地点は擁壁を隔てて現道と接しており、調査区外へ

延びる部分については現道整備の際に失われたものと判断される。

また同建物が位置する南東隅付近では、近世の可能性のある土坑1基を確認している。同土坑内には礫石が集積しており、一部には打割痕跡が観察される石材もみられた。そのほか、柱穴と思しき土坑数基を確認しているが、いずれも単基での検出であり遺物も出土せず、配置・規模及び時期については不明とせざるを得なかった。特異な遺構としては、近世～近代の窯道具のサヤ鉢2点を、底部を貫通させた1点を上段に、非貫通の1点をその下段に、2段に重ねて埋設した土坑が挙げられる。掘り方の直径はサヤ鉢のそれをやや上回る程度と無駄がなく、サヤ鉢内からの出土遺物はなかった。何らかの長尺物を同所に差し立てることを意図して転用・埋設されたものと考えられる。本遺跡の東側の丘陵中には、平安時代の須恵器窯、倉垣コマクラベ窯跡が近接する。町史には、同窯跡に至る小径のほとりに、幕末～明治初期の瓦ほか日用雑器を焼いたという伝承の窯跡、「ハザマ窯」の存在が記されている。このサヤ鉢は、同窯跡から持ち込まれたものと考えておきたい。

2カ年にわたり実施してきた本遺跡の調査であるが、今回を以て当事業に係る現地調査は完了となった。(金山哲哉)



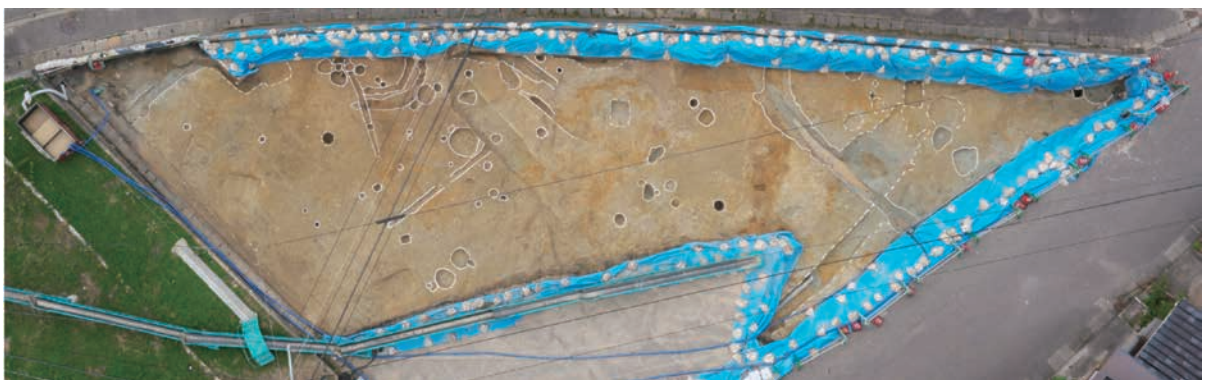
竪穴建物(南東から)



竪穴建物屋内土坑(南から)



集石土坑(北から)



調査区全景(南東から)

おお ば 大 場 遺 跡

所在地 金沢市大場町東地内

調査期間 令和5年5月9日～令和5年11月2日

調査面積 4,940㎡ (2,470㎡×2面)

調査担当 西田昌弘 岩城栄淳 石田 健
新美祥人夢 歌代若菜 鈴木静華



遺跡位置図 (S=1/25,000)

大場遺跡は、森下川下流の沖積平野に位置する集落遺跡である。昭和45年には県立金沢向陽高校校舎建設に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の甕や高坏、中世の土師器皿が出土し、祭祀的性格が指摘された。

今回の調査は、石川特別支援学校高等部新校舎整備事業に伴うもので、昨年度に続いて2年目の調査となる。

今年度は、調査区を4～6区に設定し、調査を行った。また、森下川や河北潟に起因する氾濫・湿地堆積層を挟んで上下二面の遺構面を確認し、上面を第1面、下面を第2面とした。

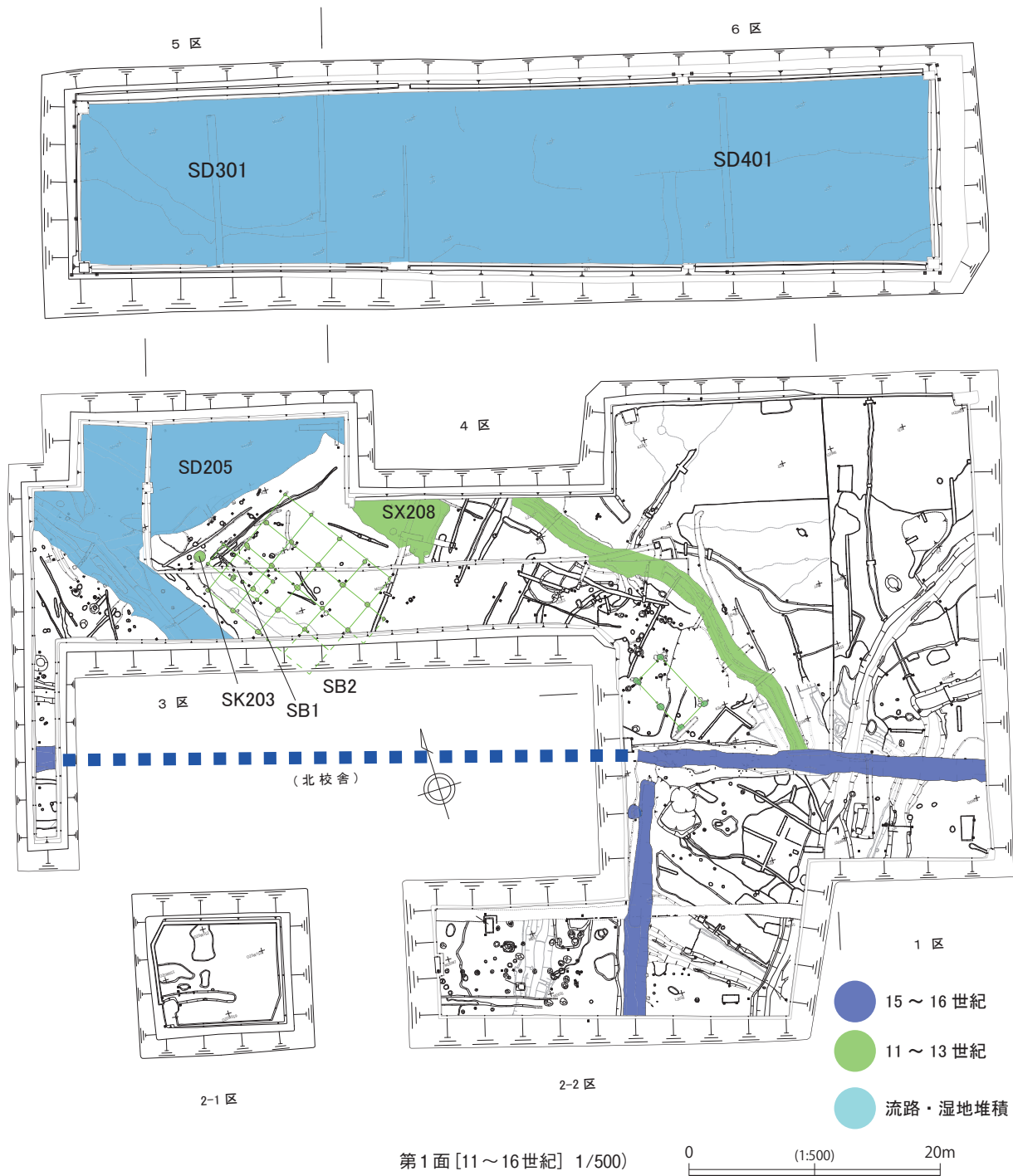
第1面では、掘立柱建物、溝、土坑、小穴、低地地形を検出した。昨年度調査区(3区)と4区にまたがる総柱建物2棟(SB1・2)の規模が確定した。SB1は1×2間で床面積約10㎡、SB2は4×4間の床面積約105㎡である。特に、SB2は南東側に庇を持つ可能性が考えられる。SB1・SB2の主軸はともに、北を基準に西へ約30°振っている。主軸方向がほぼ等しいことから、両建物は近い時期のものと考えられる。また、流路に囲まれた地形から、大型総柱建物(SB2)が低地の側の微高地上に建っていた様子をうかがうことができる。大型建物の側では井戸(SK203)が確認され、井戸枠の痕跡を検出した。掘削の過程で、漆器皿や箸状木製品などが確認されている。出土した漆器皿から12世紀頃の遺構と考えられ、大型総柱建物(SB2)との関連性を考えることができる。包含層状の堆積(SX208)から、土師器皿が12枚まとまって出土した。底面に回転糸切り痕が見られることから、11世紀末頃のものと考えられる。しかしながら、周囲からは土師器皿のまとまりを示す痕跡を見いだすことはできず、用途等は不明である。

調査成果の要点

- ・ 11～13世紀の低地に面した微高地上で掘立柱建物(SB1・SB2)や井戸(SK203)を検出した。
- ・ 11世紀から16世紀の遺物が多く出土する低地地形を検出し、当時の集落周縁の環境を確認した。
- ・ 8世紀後半頃と考えられる掘立柱建物(SB201)を検出した。

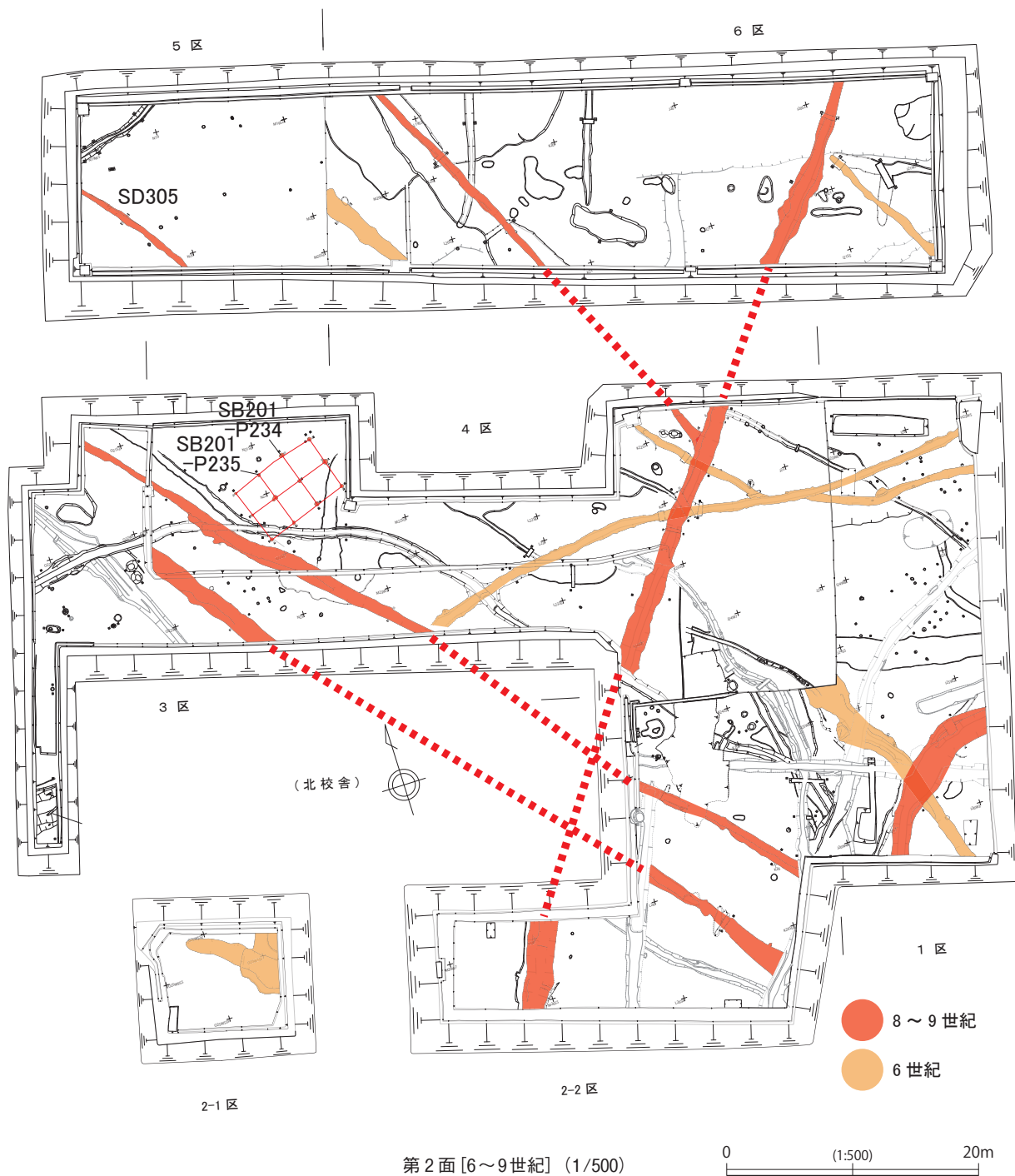


調査区割図



調査区北側では、5・6区にまたがる低地（SD205・301・401）を確認した。低地からは、土師器皿や箸状木製品、桃核が多く出土している。特に、土師器皿には油痕が見られず、実際に使用された痕跡に乏しいことから、箸状木製品や桃核とあわせて祭祀に関連する遺物である可能性が考えられる。低地からは11世紀から16世紀頃までの遺物が出土しており、集落の側に長期にわたって湿地地形が存在していたことがうかがえる。

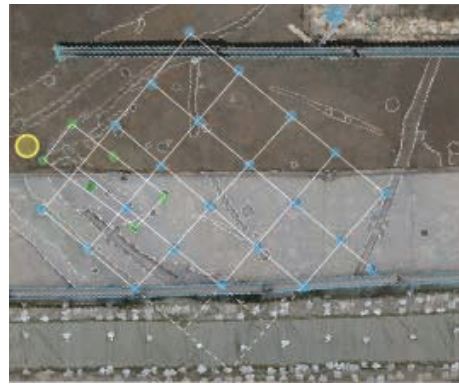
第2面では、掘立柱建物、溝、小穴を確認した。検出された建物（SB201）は、8世紀後半頃の総柱建物である。建物の規模は2×3間で床面積約33㎡をはかり、その主軸は北を基準として東に約70°振っている。確認された柱根として、多角形に面取り加工をしているもの（SB201-P234）や、半割材を使用しているもの（SB201-P235）が挙げられる。



大場遺跡の周辺は、河北潟の水位変化や森下川の氾濫などの影響で度重なる氾濫を受け、湿地や沼地が形成されやすい軟弱地盤の地であった。第2面（6～9世紀頃）では、排水溝をきるなどの工夫をしながら短期的な集落を営んでいた様子をうかがうことができる。11世紀後半頃には氾濫の影響は小規模になって地盤が安定し始め、沖積平野の開発が活発化していったと考えられる。このように、今年度の調査では、度重なる水害などにより短期的な集落となった古墳時代や奈良・平安時代の様子と、沖積平野の開発が活発化した11世紀以降の立地環境や建物規模など、具体的な集落の様子をより一層明らかにすることができた。（鈴木静華）



調査地遠景（東から）



SB1・SB2（過年度合成写真）



SK203 井戸柱痕跡（北から）



SX208 出土土師器皿（南西から）



SD301・SD401 出土遺物



SB201（北西から）



SB201-P235出土柱根（西から）



SD305出土須恵器（北西から）

まっなぎとまり
馬 縹 泊 遺 跡

所在地 珠洲市馬縹町地内
調査面積 200㎡

調査期間 令和5年10月16日～令和5年11月30日
調査担当 伊藤雅文 歌代若菜



遺跡位置図(S=1/25,000)

調査成果の要点

- ・ 基盤層下から岩石を検出し、かつて調査区まで岩石海岸が広がっていたことがわかった。
- ・ 岩石海岸を利用した製塩炉を5基検出し、小規模で短期間の製塩活動が推測された。
- ・ 棒状尖底土器が出土した。
- ・ 遺物包含層から珠洲焼が出土し、12世紀前半には製塩活動が終了していた。

遺跡は、北は能登半島外浦、南は山にはさまれた海岸線に位置している。昭和63年(1988)の踏査で製塩土器と珠洲焼が見つかり、製塩遺跡と認識された。能登半島沿岸部は弥生時代末から平安時代にかけて土器製塩が盛んに行われていることが知られる。

調査では基盤層に入り込む岩石(写真2・5、図1-③)や、風化して粘土化した岩石(図1-②)を各所で検出し、以前は岩石海岸が調査区まで広がっていたことがわかった。また岩石海岸を利用した製塩炉とみられる焼土・被熱岩石(SL01～04・06)を5基検出した(写真2・3、図1-①)。規模は直径0.4～0.8mと小さく、岩石の隙間を埋めるように厚さ5～20mmの粘土を貼る。岩石に中～小型の石を添える炉もみられた。規模の小ささや粘土の薄さから、小規模で短期間の操業であったと思われる。

その他、炉に使用する前の粘土床(写真4)や、近世の塩田造成面(写真1)を検出した。塩田造成面は、上層に黄灰色粘性砂土、下層に灰色砂が堆積している。製塩土器は、濃縮した海水を煮詰める煎熬容器である棒状尖底土器が出土したが、出土量は極めて少なく、小破片がほとんどであった。一方で基盤層を覆う包含層から12世紀前半の珠洲焼が出土し、中世には製塩活動は終了していたことがわかった。

当遺跡の年代は、県下で煎熬容器が土器から鉄釜に移行すると考えられる土器製塩終焉時期(10～11世紀)にあたると思われる。また焼塩を行っていた可能性や、鉄釜を併用した可能性も考え得る。

なお、調査において地域の方々には多大なるご協力をいただき、また温かく見守っていただきました。能登半島地震で被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。(歌代若菜)



調査区遠景(東から)



調査風景(西から)

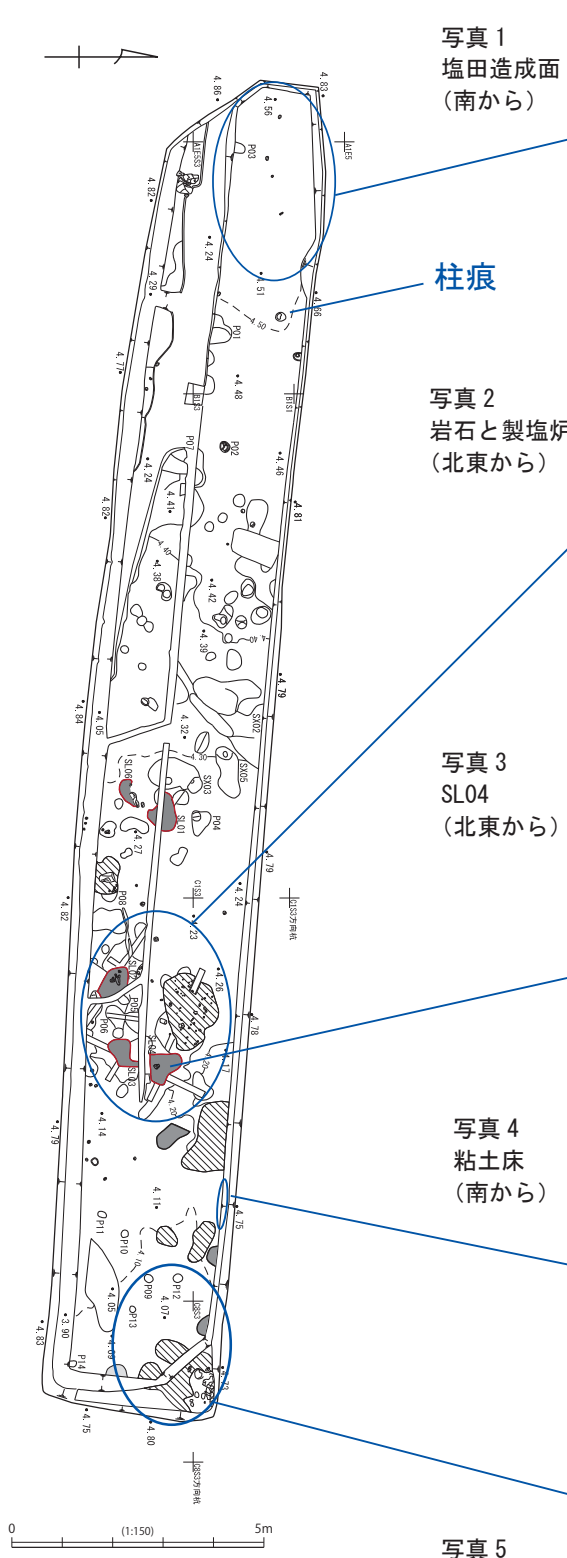


図1 遺構全体図

- ① ■ : 製塩炉
- ② ■ : 粘土化した岩石
- ③ ▨ : 岩石

写真1
塩田造成面
(南から)



柱痕

写真2
岩石と製塩炉
(北東から)



写真3
SL04
(北東から)



棒状木製品

写真4
粘土床
(南から)



写真5
岩石
(南から)



令和5年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

令和5年度下半期は、金沢城跡（金沢市 令和4年度調査）、酒井バンドウマエ遺跡、寺境タブ遺跡（羽咋市 平成29年度調査）、庄・西島遺跡（加賀市 平成30年度調査）の整理作業を行った。金沢城跡、酒井バンドウマエ遺跡、寺境タブ遺跡は上半期からの継続であり、金沢城跡は記名、酒井バンドウマエ遺跡、寺境タブ遺跡は土器、金属器の実測・トレースの作業を行った。

庄・西島遺跡では木製品の分類・接合作業を行った。主に川跡から多くの木製品が出土しており、斎串や人形などの祭祀具、杓子、ひしゃくの柄、盤、曲げ物や桶とその未成品、木靴や下駄、横槌などの工具、編み物、杭や矢板、棒材類、建築部材と思われる部材等、バラエティーに富んだものであった。（横山そのみ）



土器実測（酒井バンドウマエ遺跡、寺境タブ遺跡）



大型木製品の分類（庄・西島遺跡）



木製品の分類（庄・西島遺跡）



木製品の接合（庄・西島遺跡）

県関係調査グループ

令和5年度下半期は、庄・西島遺跡(加賀市 平成29年度調査)、漆町遺跡(小松市 平成27年度調査)の整理作業を行った。

庄・西島遺跡は、上半期に引き続き出土品の記名・分類・接合作業を行った。須恵器の坏や蓋が多く他には墨書土器、甕、提瓶、円面硯、土師器では甕、埴、甑、弥生では甕、壺、高坏も接合した。土製品では、かまど、支柱、小型の土馬も見られた。

漆町遺跡は、木製品の実測・トレースと鑄造関係の実測を行った。鑄造関係は鍋の鑄型、湯だめ、中甑、埴塙の蓋等、初めて実測する遺物で戸惑う事も多く調査員に聞きながらの作業となり時間がかかったが、貴重な知識と経験になった。木製品の実測は、井戸枠が中心で加工の方向等慎重に観察しながらの作業となった。(小島紀子)



土器接合作業 (庄・西島遺跡)



小型の土馬 (庄・西島遺跡)



湯だめの実測 (漆町遺跡)



木製品の実測 (漆町遺跡)

特定事業調査グループ

下半期は、矢田遺跡(七尾市 令和3年度調査)、島遺跡(小松市 令和2年度調査)の整理作業を行った。

矢田遺跡は、上半期に引き続き記名・分類・接合を行い、土器の実測・トレース作業も行った。記名・分類・接合では、手づくねが多く出土していた。小壺の口縁部、体部、高坏の坏部、脚部が多く出土していたが、なかなか形にならなかった。一個体の甕もいくつかあり接合を見るのに手間取った。移動式かまどの破片があり、初めての遺物だったのでどんな形になるのか担当者の方に資料いただき、窓の部分などの破片が見られた。今年度はDランクの土器の実測・トレースを行った。

島遺跡は記名・分類・接合、実測・トレース作業を行った。1箱と遺物が少なかったが、須恵器の甕の体部片や有台坏の底部が多く出土していた。(土生久美子)



記名・分類・接合 (矢田遺跡)



土器の実測 (矢田遺跡)



記名・分類・接合 (島遺跡)



土器の実測 (島遺跡)

令和5年度 環日本海文化交流史調査研究事業の記録

環日本海文化交流史調査研究事業は、日本海沿岸地域の歴史的理解を深め、日本海に面した石川県の歴史的特質を明らかにするため、テーマを設定し、沿岸各地域と調査・研究を行い、交流を図るものである。令和5年度、6年度のテーマは「高地性集落－日本海沿岸地域を中心として－」とし、近年様々な角度から高地性集落をとらえ直す研究が進められている中で、日本海沿岸地域の様相をとらえ明らかにしていくことを目指している。

平成12年度から始まった研究事業は、当初1年単位のものであったが、平成29年度から1年目を基礎研究、2年目に調査・研究を深化させまとめの年とする2年単位の事業となった。1年目となる今年度は、日本海沿岸7地域の方々に共同研究者となつていただき、各地の高地性集落の概要を報告してもらい調査研究集会を開催した。また、高地性集落を考える上での着眼点を得るため、同志社大学の若林邦彦さんにご講演を賜った。

研究集会は2月開催を予定しており、令和6年1月1日の能登半島地震発生に伴い開催可能か危ぶまれたが、多くの方々のご協力で、石川県埋蔵文化財センター研修室を会場に、県内の埋蔵文化財関係者や当法人職員など100名の参加者を得て予定通り開催することができた。

令和6年2月21日(水)

○ 報告

- 【九州北部】 山崎 頼人(小郡市埋蔵文化財センター)
- 【山口県】 田畑 直彦(山口大学埋蔵文化財資料館)
- 【鳥取県・島根県】 濱田 竜彦(青谷かみじち史跡公園準備室)
- 【近畿北部】 加藤 晴彦(与謝野町教育委員会)
- 【福井県】 深川 義之(鯖江市教育委員会)

○ 質疑応答・本日のまとめ

令和6年2月22日(木)

○ 報告

- 【石川県】 鈴木 静華((公財)石川県埋蔵文化財センター)
- 【富山県】 細辻 嘉門(富山市埋蔵文化財センター)
- 【新潟県】 佐藤 慎(妙高市教育委員会)

○ 基調講演「長期変化からみた高地性集落顕在化の条件」

若林 邦彦(同志社大学歴史資料館)



報告 (左:濱田氏、右:加藤氏)

報告 (上から、山崎氏、田畑氏、深川氏)

山崎氏は北部九州の豊富な先行研究を紹介しつつ、丘陵性の集落と、比高が100mを越える超高地性集落が存在することを示した。集落に伴う環濠機能が多様であることから、高地性集落の機能にも多様性がみられることを指摘し、森林資源の獲得など生業とのかかわりを示唆した。

田畑氏は山口県の3地域について、時期別の集落遺跡の動態について述べる中で、高地性集落を紹介された。大阪平野などと集落展開に異なる点がある理由として、急峻な地形や大雨に弱い花崗岩質の地盤であることを可能性としてあげた。

濱田氏は大山山麓の集落展開について時期ごとの特徴をあげ、高所の集落が増加する背景に、低地での人口増加、水害・冷害による低地での食料生産停滞などがあると指摘した。社会、環境の両側面から集落の動態をとらえる必要性を提示した。

加藤氏は近畿北部の丹後を中心に山や丘にある遺跡を紹介する中で、投弾的な礫が出土し防衛監視機能をもつ集落と、自然災害対応の避難所的集落がある可能性を示した。

深川氏は福井県内の比高20～25m以上の遺跡を取り上げ、河川沿いの内陸平野部に分布する状況を報告した。調査事例が少ないため遺構が十分に検討できないとしながら、存続期間は、弥生中期後葉以降、古墳前期前葉にいたる中で3時期見られることを示した。

鈴木氏は対象遺跡の標高と比高をグラフ化し、比高が20m以上ない場合は、標高が高くても“高所立地の集落”であり高地性集落ではない可能性を示唆した。また石川県内では奥能登以外に分布が見られ、眼下に低地を広く見渡せる場所に立地する遺跡が多いことを示した。

細辻氏は、急斜面のため平野からの行き来が困難な遺跡が、富山県内では丘陵先端の舌状台地や河岸段丘沿いに見られると報告した。中世の城館や砦と重なる遺跡が多く、弥生時代後期後半に出現し、古墳時代前期に見られなくなるという。遺跡の構成要素の分析を、今後進める予定とされた。

佐藤氏の報告では、新潟県内では比高30m以上のものが高地性集落とされてきたこと、異系統の土器が混在する地域に分布が集中すること、大規模な集落には同一丘陵上に墓地が存在し立地や埋葬方法などに階層性が認められることなどが示された。

以上の報告は2日間にわたり、質疑応答では県内の埋蔵文化財担当者から質問が寄せられた。2日目には報告の後、若林氏の基調講演が行われた。高地性集落の研究史をひもときながら、現代の研究視点までを解説され、生業や自然災害を含めた生活環境と、集落のあり方をどうとらえるかなど興味深い内容であった。

研究集会の終了後、共同研究者会議では、地域性、多様性の存在が指摘され、「高地性集落」を定義しようとするより、周囲の遺跡との関係や遺跡動態のあり方などから、地域ごとに何が言えそうか探っていく方向性が示された。次年度の研究集会に向け、各地域で縄文時代晩期～古墳時代前期の遺



報告（上から、鈴木氏、細辻氏、佐藤氏）

跡を対象として、標高・比高のグラフ化や、地形図を利用
しての立地の可視化などを試みることになり、共同研究者
の皆様には現在それらの作業を進めていただいている。

平成12年度から継続してきた調査研究事業であるが、
今回が最後となる。日本海沿岸地域の弥生時代遺跡のあり
方を探りながら、石川県をはじめ各地域の特色をとらえる
ことができれば、集落研究の一端になんらかの提示がで
けるのでは、と次年度の研究集会を楽しみにしているところ
である。 (山川史子)



共同研究者会議の様子



講師の若林氏

調査研究集会の推移

回数	開催期日	事業内容(調査研究集会テーマ)	記録の掲載 (石川県埋蔵文 化財情報)
第1回	H13.2.23	環日本海交流史の現状と課題	
第2回	H14.2.22	鉄器の導入と社会の変化	第8号
第3回	H15.2.21	玉をめぐる交流	第10号
第4回	H15.10.24	縄文後晩期の低湿地集落 - 生業の視点で考える	第11号
第5回	H16.10.29	古代日本海域の港と交流	第13号
第6回	H17.10.28	中世日本海域の土器・陶磁器流通 - 甕・壺・摺鉢を中心に -	第15号
第7回	H18.10.27	縄文時代の装身具 - 漆製品・石製品を中心に -	第17号
第8回	H19.10.26	日本海域における古代の祭祀 - 木製祭祀具を中心として -	第19号
第9回	H20.10.24	弥生時代の家と村	第21号
第10回	H21.10.23	日本海域の土器製塩 - その系譜と伝播を探る -	第23号
第11回	H22.10.29	近世日本海域の陶磁器流通 - 肥前磁器から探る -	第25号
第12回	H23.10.28	中世日本海域の墓標 - その出現と展開 -	第27号
第13回	H24.10.26	弥生時代の墓	第29号
第14回	H25.10.25	舟と水上交通	第31号
第15回	H26.10.24	江戸時代の墓	第33号
第16回	H27.10.23	中世前半における輸入陶磁器とその流通	第35号
第17回	H29.2.24	環日本海文化交流史研究の展望	第37号
第18回	H30.2.23	近世成立期の土器・陶磁器様相 - カワラケを中心に -	第39号
第19回	H31.2.23	北陸にみる近世成立期の土器・陶磁器様相 - 城下町とその周辺遺跡の土師器皿(かわらけ)を中心に -	第41号
第20回	R2.2.26	古代・中世の木製容器	第43号
第21回	R3.2.19	古代の木の器(うつわ) - その2	第45号
第22回	R4.2.24	古墳時代の祭祀~水のマツリを中心として~	第47号
第23回	R5.2.24	古墳時代の水のマツリ	第49号
第24回	R6.2.21・22	高地性集落-日本海沿岸地域を中心として-	本号(第51号)

長期変化からみた高地性集落顕在化の条件

若林邦彦(同志社大学歴史資料館)

【高地性集落理解の枠組みの変化】

古墳時代は列島規模の政治的社会的広域統合の時代と考えられている。それに至る社会緊張としての高地性集落(環濠集落も)が認められるという枠組みが一般的な説明体系である。加えて、AD 2世紀後半～3世紀初頭のイベントとして記載された後漢書「倭国乱」・魏書「倭国大乱」も重要な要素だった。

『島田川』(小野編1953)で弥生高地性集落に注目した小野忠熙も、紫雲出山遺跡の石鏃分析を皮切りに弥生中～後期社会に近畿の有力性を説いた佐原真(小林・佐原1964、佐原・田辺1966)も上記2点を念頭に高地性集落論を展開した。いわば典型的な高地性集落を「統合過程で顕在化する軍事施設」とみる立場である。これは高校日本史教科書における説明となり、現代日本の標準教養とみなされている。それに修正や異を唱えないことはそのままを弥生時代研究者が追認していることになるが、実際には、我々はそれをこの共同研究で再検証している。

これまで多くの研究者がこの「教養」を再検討してきた。都出比呂志(1974)は、高地性集落が狼煙台などの機能を持ち社会的緊張関係時などに(前期古墳群につながる)農業共同体の連携において機能する着想を示した。森岡秀人(森岡1981・1982)も六甲山麓の弥生遺跡動態の一部で高地性集落の評価を始める。また、伊藤実(伊藤1991)は、中西部瀬戸内海沿岸島嶼部の高地性集落を、航路監視とそれへの攻撃などの拠点と考える視点を明示した。交流路などとの相関で説明を試みたといえよう。柴田昌兎(柴田2004)は、瀬戸内地方では丘陵中腹付近に位置する「山住みの集落」から、航路監視やルート上のランドマーク機能を果たす集落があらわれ、典型的な高地性集落が形成されたと述べた。

つまりは、「乱」を反映した軍事的集落の抽出あるいは古墳時代につながる地域間勢力論という脈絡から離れていく研究状況は明確で、弥生中期中葉以後の社会的ネットワークの発達やそれに呼応する地域社会モデルの一端として高地性集落を論じるようになった。当共同研究は、まだ教科書には載らないこれらの研究動向を前提として進行し、成果を社会に還元できる可能性をもっている。

一方では、古墳時代の高所の遺跡を「高地性集落」と呼ぶことはない。実際にそういう立地や属性を持った遺跡があるのか否かの検証も明確にはできていない。特殊な立地か否かは別として、筆者の統計だと大阪平野においては弥生後期に丘陵上集落形成地点は増加し、古墳時代にはややそこから減る(若林2022)。とはいえ、高所利用頻度自体は弥生後期から古墳時代に激変はせず微減してそのまま推移する。長期過程をみると、むしろ弥生中～後期の変化にともない丘陵利用が高まるのが近畿地方の特徴である。おそらく瀬戸内地域ではその変化が中期後半に先に進行したと理解すべきなのだろう。西日本では、複数の地域で丘陵や山頂的地形の利用頻度が高まる時に「典型的な高地性集落」が増加するというのが実態である。

また、東日本、特に関東地域では中期後半以後の一般的集落が段丘上に立地することが多いことから、そこから特に異なる高地性集落の特徴をことさらに抽出すること自体が難しい。平野と一定の比高差のある集落といえば大半のものがあげられ、急峻な尾根上立地し明確な防御遺構をもつような集落遺跡を明確な基準で抽出することは難しい状態である。つまり、西日本を軸とした高地性集落という類別およびそれを含む弥生地域社会というものは、汎列島の適応できるわけでもない。

上記を考慮すれば、高地性集落とは戦乱や社会的緊張といった古墳時代への統合過程イメージの存在を前提とした解釈の産物にもみえる。そこにそれぞれの地域で引きこされた集落分布構造の動態が仮託され、いくつかの特徴的な遺跡が抽出されて議論の対象となってきた。遺跡における特定の属性あるいはその組み合わせで高地性集落が共通基準で「同定」されてきたものではない。

【近畿地方での検討の方向性の例】

となると、高地性集落を通常集落から分離してその時間的増減や地域による動態の差異よりは、むしろ弥生～古墳時代の集落の立地選択の上で、低地／高地という違いがどのように作用しているかという視点がどうしても必要となる。急峻で比高差の大きい地形や武器の多数保有や環濠などといった特殊に見える遺跡をそういった時間的空間的な遺跡立地の相対的変遷の中で吟味しなければ、発端となった統合に相関するかもしれない社会的緊張の性質を論じることができないということになる。筆者が取り組んできた立地を加味した遺跡形成地点の定量分析（若林2021・2022）は、この方向性を含みおこなっている。図2で大阪平野の遺跡地点数の増減、図3でその比率を明示している。高地性集落が増加する時期である弥生後期は、丘陵上集落に比率が増える時期であることがわかる。後期初頭に集落減があることは注目されているが、暦年代数を加味して地点数を割る指数で検証をしてみた（図1）。この図には、年輪酸素同位体比変動を用いた降水量変動を重ねている。それにより、近年重要な要素について気付いてきた。遺跡・集落形成の移動頻度という要素である。近畿地方では弥生後期から古墳時代初頭には移動頻度の高い遺跡形成がみられる（図1）。この時期と、「属性上で抽出しやすい高地性集落」の増加は相関している。移動頻度が高まる理由には、従来の観点では古墳時代への移行期であるという社会構造的要素とともに、多雨冷涼化傾向がBC1世紀以後に高まる気候状況（中塚・若林・樋上編2021）が明瞭である。こういった要素などが作用して、「属性上で抽出しやすい高地性集落」の顕在化につながるのかどうか、という議論もまた重要と感じる。もちろん集落移動頻度や立地比率は同じ時期でも地域によって様相が異なる。その様相の差異もまた議論の対象となるだろう。その結果「属性上で抽出しやすい高地性集落」というものへの着目自体の意味・意義を下げる結論へと至る可能性もまた許容しなければならないと思うがどうか。

【課題と研究の方向性】

こういった点を考慮すると、次の3点についての研究や議論が必要になることを指摘して結びとしたい。

- 1) これまで各地域で行われてきたように、比高差・遺構の性格・遺物組成などから、何を高地性集落と呼ぶかについてデータに基づいた検討と議論が必要である。この場合には、地域によって「高地性集落」の定義が違う可能性も容認する必要ありか／否か、の議論が不可欠となる。一方で、その結果抽出できた高地性集落が、どの時期に増加・顕在化（反対に減少）するのかを、長期的かつ空間的（地域によって動態が異なる様相）について検討することが必要である。
- 2) この際には、高地性集落ではない遺跡も含めた動態分析が不可欠となる。また、高地性集落が、全体として弥生時代後半期を中心に多くみられるかどうかを本当に確認してみなければならない。これらを行うと結局「多様性」を強調した発言が進むと思う。しかし、もし「弥生時代後半期＋古墳時代初頭を中心に各地で様々な形で顕在化する」ことを全体として説明できるならば、要因・原理について、常に仮説提示していくことが必要となるだろう。
- 3) 留意すべき点として、「多様」というだけでは、どのように多様かを表現すること自体が不可

能になってしまうことをあげたい。結局、各地域で長期変化の中で、あらゆる遺跡を含めた分析をすることが必要であろう。つまり、あらゆる遺跡データの検討が必要になってしまう。その点で言えば、高地性集落論は超包括的な遺跡形成論だろう。この議論をすすめることは、すべての時代のすべての調査情報が対象となる埋蔵文化財調査成果の利用の究極となると考えたい。

引用・参考文献

- 小野忠熙編 1953『島田川－周防島田川流域の遺跡調査研究報告』、山口大学島田川遺跡学術調査団
- 佐原眞・田辺昭三 1966「弥生文化の発展と地域性－近畿」『日本の考古学Ⅲ弥生時代』、河出書房
- 小林行雄・佐原眞 1964『紫雲出－香川県三豊郡詫間町紫雲出山弥生式遺跡の研究－』、詫間町文化財保護委員会
- 都出比呂志 1974「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻第4号、考古学研究会
- 伊藤実 1991「瀬戸内の環濠集落と高地性集落」『古文化論叢－児嶋隆人先生喜寿記念論集』児嶋隆人先生喜寿
祈念事業会
- 柴田昌児 2004「高地性集落と山住みの集落」『考古資料大観10弥生・古墳遺跡遺構』、小学館
- 中塚武・若林邦彦・樋上昇編 2020『気候変動から読みなおす日本史第3巻先史・古代の気候と社会変化』、
臨川書店
- 森岡秀人 1981「東六甲の高地性集落－上－」『古代学研究』第96号・1982「東六甲の高地性集落－中－」
『古代学研究』第97号、古代学研究会
- 若林邦彦 2021『弥生地域社会構造論』、同成社
- 若林邦彦 2022「大阪平野における弥生時代以後の集落移動頻度の検証」『古代文化』第74巻2号、古代学協会

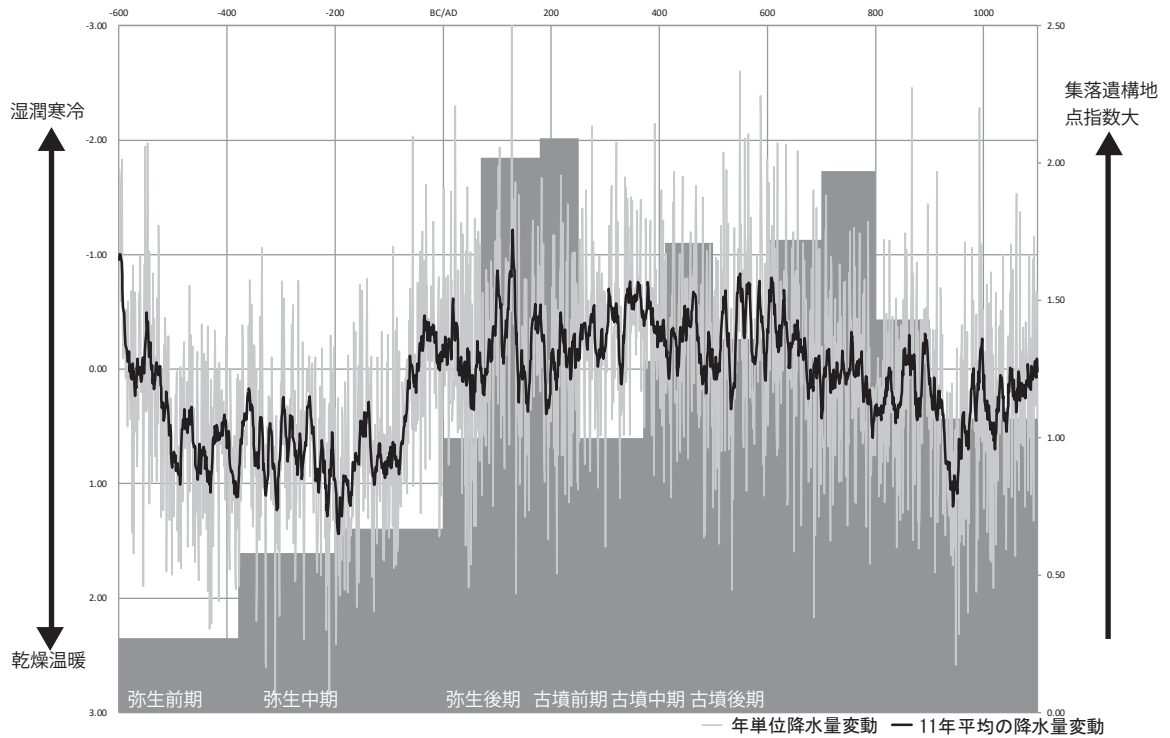


図1 年輪酸素同位体比変化(折れ線グラフ)と大阪平野の年単位集落遺構検出指数(地点数/暦年代数)の変化

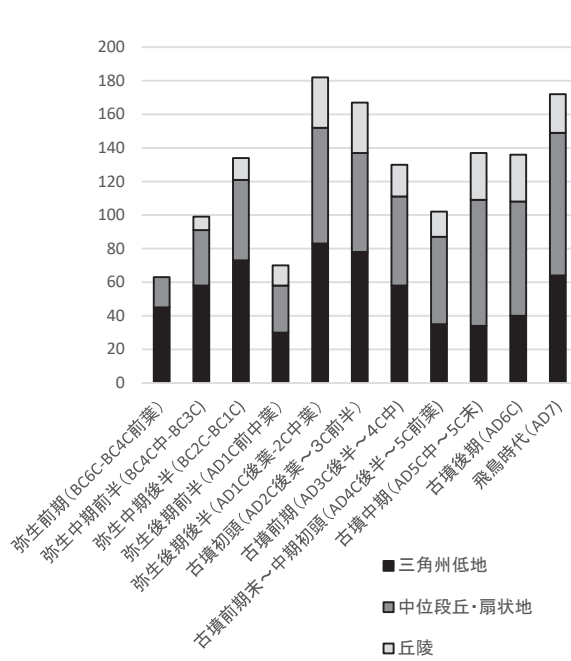


図2 大阪平野の集落遺構検出地点数の変移

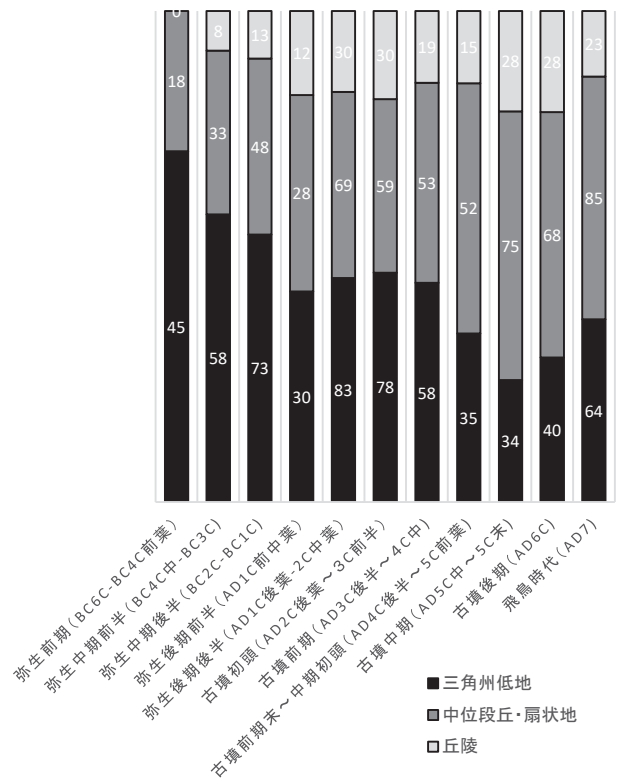


図3 大阪平野の集落遺構検出地点の立地比率変遷